

「トキメキ」



WISH TIMES

セルフケアの喜び
忘れられない夏があなたにはありますか
フォトグラフィー：つながりや見えないもの
に喜びを探すこと
あなたはネジの作り方を知っているか？
Reborn：フェニックスのように
WISHTimes愛

Version 43
July 2021

目次

- 2 セルフケアの喜び
- 4 忘れられない夏があなたにはありますか
- 7 フォトグラフィー：つながりや見えないもの
に喜びを探すこと
- 10 あなたはネジの作り方を知っているか？
- 13 Reborn：フェニックスのように
- 15 WISHTimes愛



セルフケアの喜び

Writer & Translator: Sarah | Designer: Ainun

今月のWISH TIMESのテーマが「ときめき」だと言われた時、正直、何を書こうか迷いました。私にとっては、この1年、常に室内に籠ったり、人との距離を保たなければならない状況は「喜び」とは思えませんでしたし、きっと、このような状況はもうしばらく続くのでしょうか。

私は、質問を
"楽しむために何をしましたか?"
にリフレーミングしてみました。

いくつかの事が頭をよぎります。例えば、Netflixを見たり、本を読んだり、自然の中を散歩したり。そして、この1年の間、誰もがしてきたであろうこれらの事は、つまりは、自分自身のための時間を持つ事だということに気がつきました。


今まで私は、自分が費やしている時間の質について、特に気を止めて考えたことはありませんでしたが、現在のコロナ禍では、一人で過ごす時間が生活の大半になってきています。私たちが日々変化し成長していく中で、私は時々「自分のことをどれだけ知っているだろうか？自分にとって大切だと思える価値ある時間を持っているだろうか。」と立ち止まって考えるようになりました。私たちが外の世界と繋がれる手段のほとんどがソーシャルメディアになった時、一方的に情報を浴びせられ、情報過多になり、様々な思考が休まることなく頭や心の中を巡り、自分自身を見失いがちにります。私も例外ではなく、アメリカでコロナ禍の自粛生活を送っていた時は、精神的にそのような辛い状況になりました。そして、特にこのコロナ禍においては、後の幸せのためには、今、忍耐強く我慢して、頑張らなくてはいけないという風潮が社会にあります。私は、自分自身を深く見つめる1年を通して、これが恒常的な過労と自分自身の消耗に繋がるのではないかと気がつきました。そして、私はこういう風にも思いました。

今、幸せを感じることをしても良いのではないかと。

この1年で私が学んだ最も貴重な教訓の1つは、幸せになるために苦難を経験する必要はなく、1日のうちの12時間を常に仕事や人との付き合いに費やす必要もないということです。自分自身のために時間を使うということは、自分にとって最も大切なものを見つけることができる、自分の成長のためにできる最善の方法のひとつです。セルフケアといっても、特別なことではありません。もちろん、すべての人に効果があるわけではありませんが、私は、幸せで自立している自分の姿を思い描く時間を持つだけでも、大きな変化と自分に対する自信につながりました。幸せの定義は人それぞれだからこそ、それぞれが日々の生活の中で、それぞれの喜びを探すことは、さらにエキサイティングなことです。

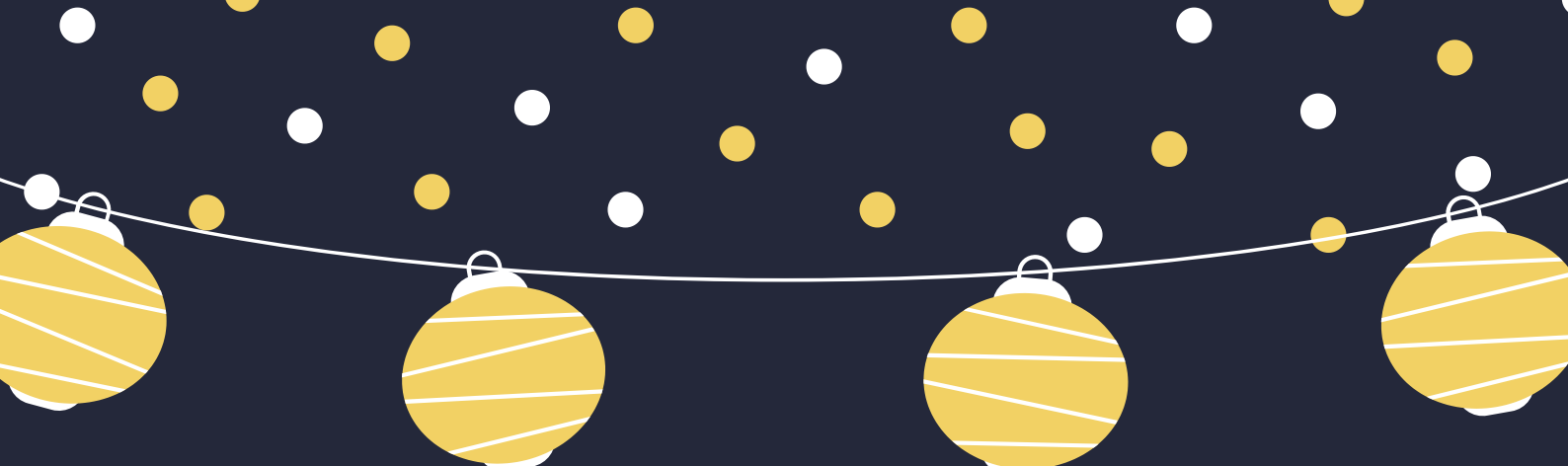
今度、慌しい日常生活にストレスを感じて、ちょっと疲れたなと思ったら、一人になって、自分のための時間を作ってみてください。世の中には様々な機会や活動、様々な人との関わりがありますが、時には一息ついて、ただそこに存在する自分自身を楽しみ、自分を大事にすることは、とても満ち足りたひとときとなると思います。





忘れられない夏が、
あなたにはありますか。

Writer: Haruka
Translator: Asami
Designer: Yukie



季節の中でいちばん夏が好きだ。焦げそうになるし、溶けそうになるし、うっかりすると足首にきれいな線が入ってしまうけれど、あおばきとした日差しの底抜けな明るさと夜の甘ったるい風のコントラストがたまらない。特に夜。夜はいつでも私にやさしいけれど、夏の夜は他よりずっとやさしい気がする。そのやさしさに甘えながら、考えなくてもいいことを考える。思い出さなくてもいいことを思い出す。夏の夜なら、それが許される。今夜はそのやさしさにそっと寄りかかって、いつかの誰かの、暑かった夏のことを考えてみようと思う。

放課後の影伸びてゆく初夏のサビが
どこだかわからない歌 狩峰隆希

この歌を一読して感じられるのは圧倒的な詩。二句切れなのか三句切れなのかは読み手によって分かれるだろうが、私は二句切れだと思っている。「放課後に伸びてゆく影」のことも「サビがどこだかわからない歌」のこともすぐに思い浮かべることができるのに、ぎゅっと胸が詰まる感じがする。これには「初夏」という言葉が大きく力を貸していると考えられる。

「真夏」でも「晩夏」でもなく「初夏」の、これから暑くなる予感を大いにはらんだ言葉。

「はつなつ」という和語特有のやわらかな響き。

初夏の放課後に歌っているのは作者かも知れないし、そばにいる誰かかもしれない。明言されていないまでも確かにそこにある歌の旋律が、まるで出口のない何かに迷い込んだような感覚をもたらしている。

ところで、夏といえば甲子園だと思う人はどのくらいいるのだろう。一般的に甲子園といえば野球が思い起こされるが、実は世の中にはいろんなものの甲子園がある。この歌は牧水・短歌甲子園という大会で発表された歌で、作者含め参加者は当時全員が高校生である。自作の短歌をもとに相手校とディベートを行い、俵万智先生を筆頭に豪華な審判によって勝敗が決せられる知る人ぞ知る熱い甲子園だ。

自転車の後ろに乗ってこの街の右側
だけを知っていた夏 鈴木晴香

どこにも人の存在が書かれていないのに、はっきりと自転車を漕いでいる誰かが見えてくる。作者は荷台に乗っている。荷台をまたがずに右側に足を投げ出しているのは、きっと彼に会うときはいつもスカートだったから。右側だけしか知らないということは、彼はいつも駅まで迎えに来てくれていたのだろうか。毎回じゃなくても、街並みを覚えてしまうほど何度も、何度も作者は彼の住む町に来て、そして同じだけ彼は自転車で迎えに来てくれたのだ。

彼が漕いでくれる自転車はゆっくりと進んで、頬に当たる風は気持ちがいい。その夏のことを思い返す作者の姿まで、視点を引くと見えてくる。この歌を読むと、どこかで風がゆっくりと動くのが分かる。そんな一首だ。

あさがおが朝を選んで咲くほどの出会い
と思う肩並べつつ 吉川宏志

夏の夜はやさしいと言ったが、朝はどうだろう。日が出る前の静かな夏の朝の白い時間に、私はどこか異世界的な雰囲気を感じる。夏なのに眩しくない午前中という空間は、なんとなく普通ではない気がしてくるのだ。

そんな朝を選んで咲く朝顔の神秘性を捕まえて、自分たちの出会いを飾らせている作者がこの夏の出会いに抱いている期待の、なんと疑いのないことか。肩を並べて歩きながら、作者は確信しているのだ。二人の夏がただの夏ではないことを。

向日葵をぐいと見上げる角度にて初めて
ひとに贈るくちびる 宮本陽香

一首目の流れで紹介した短歌甲子園からもう一首。とっても気に入っている歌なので出させていただいたが、評はここには書かない。この歌を私がまじめに解説するわけにはいかないのだ。今まで生きてきた私の中でいちばんに暑かった夏のことを、すこし、いや大いに白慢させてもらった。よかったね、昔の私。

季節の中でいちばん夏が好きだ。朝は不思議だし、昼は眩しいし、夜はやさしいから。それに、思い出が一番色が乗るのは夏だから。景色はぎゅんと彩度を上げて、その中で喜びは倍になって、悲しみはもっと大きくなって、そして輪郭を丸ごと全部夏の空気が包み込む。ふんわりと夏にくるまれた思い出を抱えて、私は今年も夏を迎える。

吾をさらいエンジンかけた八月の朝
をあなたは覚えているか 俵万智

覚えているのは、いや、覚えていたいの私だけかもしれない。それでも私にとってはかけがえのない「ある夏の一日」を、これからも大事にしていくつもりだ。

参考文献

- 『第六回牧水・短歌甲子園 決勝自由題』
狩峰隆希
『夜にあやまってくれ』 鈴木晴香
『青蟬』 吉川宏志
『第八回牧水・短歌甲子園 一次リーグ題詠
「贈」』 宮本陽香
『サラダ記念日』 俵万智

フォトグラフィー

Writer: Chrisanne

Translator: Non

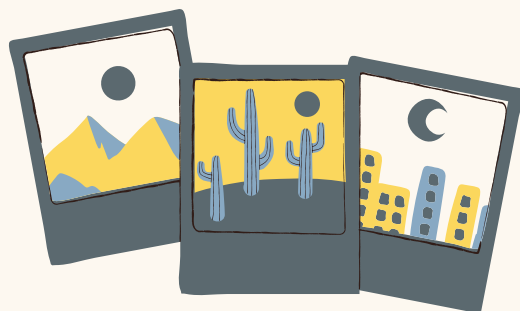
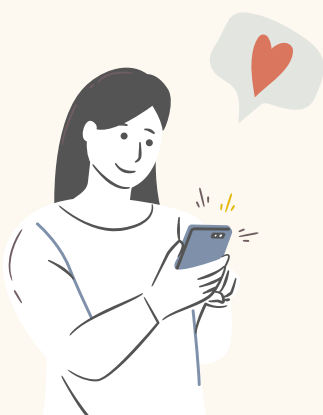
Designer: Ainun

つながりや見え
ないものに喜び
を探すこと

物語を伝える方法は数多くある。本を書く人もいれば、たくさんの人前で話す人もいるし、カジュアルな会話を交わす人もいる。私の場合は、写真から伝わる物語に魅力を感じ、大切にしている。

幼い頃から、興味の移り変わりが早く、一つのことに落ち着くことができなかった。多くのことに興味をそそられるけれど、そのうちのいくつかに対する興奮は時間が過ぎるとともに消え去った。写真との出会いは思いもよらない時に訪れたが、今では私の人生の一部になったくらいだ。私の叔父は写真館を営んでおり、もう一人の親戚も写真家である。しかし、わたしが写真の持つ強い表現力に気づいたのは、十代になってからだった。当時なんとなくインスタグラムを眺めていたら、突然あるカナダの女の子から「ハート」をもらった。

彼女のプロフィールをクリックすると、光と影の間に焦点を合わせた、まるで絵に描いたような写真が次々と現れた。これらは全てiPhone6によって撮影されたもので、私はいつの間にも夢中になっていた。巨大なデジタル一眼レフを持っている叔父を何年も見てきた私の心には、「プロ」のカメラを持つことと良い写真を撮ることは切り離せないものだと思い込んでいた。アートが多次元であることに私が気がつく由もなかった。人が感情や意味をこめて道具を使うことで、初めて真の芸術が生まれる。



それ以来、きちんとしたカメラがなければ写真は撮れないという考えを私は捨てた。写真の持つ語る力を、わたしたちは見過ごしがちである。写真という芸術は、撮影者に加えて被写体、そして写真の撮られた時代の視点を教えてくれる。もちろん、この考え方は斬新なものではない。かつては外見の美しさだけにこだわっていた私にとって、この考え方は写真を撮ることを追求している間に育ってきたものだ。

私はストリートフォトグラフィーに特に惹かれる。街の中の一瞬を撮影している時は、心臓がドキドキして浮き足立ってしまう。

「ベンチで新聞を読んでいる太ったおじさんの何がそんなに面白いの？」

「ポストの写真を撮るのは時間の無駄だよ」



多くの人が被写体に対する私の関心を不思議がる時、わたしは肩をすくめてこう答える。

「だって物語があるんだよ」

素早く動く被写体の一番いい瞬間を捉えた時や、知らない人に写真を撮ってもよいか尋ねる時の興奮は抑えきれないものだ。それに加えて、ファインダーを通してありふれた物から予想外の発見をすることは、私自身の物の見方も広げてくれる。

最近、ビビアン・マイヤーという写真家について勉強し始めた。彼女の作品は、没後に初めて発見され、20世紀初頭で最も素晴らしい写真作品のひとつとなった。生前の彼女は、地元でも有名な変わり者だったと言われている。なぜ彼女が写真を撮るのか、そしてなぜそれを現像しないのか、その答えは誰も知らなかった。しかし、彼女の撮った写真が現像を経て公開された時、人々は彼女の天性の才能に圧倒された。彼女は主にストリートフォトグラフィーを専門としており、20世紀初めのシカゴの街を捉えたものが多かった。いまだ謎ではあるが、ビビアン・マイヤーの写真たちは彼女を取り巻く忙しく発展していく社会の様子を現在に伝えたのだ。彼女のような写真家を通して、ありふれたものにこそ、写真が物語を伝える力があるのだと私は感じる。

東京の地下繁華街に立って、私の視線は道ゆく人々の中を絶え間なく泳いでいた。私はインスタグラムを通じて写真の素晴らしさを教えてくれた、あのカナダ人の女の子を待っていたのだ。写真という共通の関心だけで、地球の反対側に住む新しい友人と出会えるのは驚くべきことだった。それ以前にも、川越のお菓子横丁で写真と通じた交流があった。私がドキドキしながら勇気を出してお菓子屋さんの店員に写真を撮っていいかと尋ねた。彼女は最初こそ驚いていたものの、優しく微笑んで写真の被写体になってくれた。写真を撮り終わってカメラを下ろした時、この写真はこれから何年も大事にするだろうと直感して心が暖かくなった。



東京の緊急事態宣言に加えて大学の大量の課題を抱えた今、東京をぶらぶらしながらハンディカメラで写真を撮ることができた日々を懐かしく思う。日常の中に新しい発見をたくさんして、もっとシャッターを切りたい。私たちの興味は広く変わりやすいからこそ、それを繋ぎとめるような、揺るぎない情熱が必要なのだろう。

あなたはネジの作り方を
知っているか？

Writer: Daichi
Translator: Naomichi
Designer: Yukie

当初、7月号のテーマは「ライフハック・QOL」だと聞かされていた。私は下手な工夫などせず、普段の生活があるがままに送る純朴な人間である。加えて、QOLなぞ気にしたら負けというスタンスの持ち主であるから、早速このテーマに頭を抱えることになった。

しばらくして、テーマが変更になったという連絡がLINEで入った。ホッとされたのも束の間、数行下に目をやると、そこに並んでいたのは「ときめき」の4文字。私は早速頭を抱えることになった。最後にそんな感情を覚えたのはいつのことだろう。嗚呼、こうも私が捻くれたのは、なにゆえであるか。責任者に問いただす必要がある。責任者はどこか。

さて、思い悩んだ末に私が見つけ出した「ときめき」は、早稲田大学西早稲田キャンパス59号館にあった。カラー写真でもモノクロ写真でも大して変わらない西早稲田キャンパス。「大久保工科大学」※やら「工場」やら誉れ高い別(蔑)称を賜っているが、この59号館は冗談抜きで「工場」である。所狭しと並ぶ工作機械、張り巡らされた電気ケーブルとガス管、天井から吊り下げられたクレーン、金属とオイルのかぐわしい芳香…。そうは言っても、学生を使役して製品を大量生産し、研究費をセコセコ稼いでいるとかそういう訳ではない。ここが主に使われるのは、機械系学科の加工実習だ。切削・溶接・鍛造・鋳造・研磨…。製造業の基本となる加工技術を、作業着に身を包み、自分の手を動かしながら学ぶことができるのだ。ちょうど今年の4月から加工実習を受講しているので、そこで得たときめき、あるいはそれに類するものをここに記そうと思う。もっとも、テーマが「ときめき」なので、「ときめき」だと言い張るほかないのだ。

溶接

溶接とは、熱や圧力によって金属同士を接合する技術である。要は、お面を着けて火花をバチバチと散らすアレのことだ。私が実習で体験したのは、それらの中でもアーク溶接という放電を利用した方法だった。作業着の上に難燃性エプロン・腕部カバー・靴カバーを身に付け、遮光用シールドを片手に溶接に臨む。緊張しながら本体の電源をオンにすると、溶接棒に大電流が流れ始める。溶接棒を恐る恐る金属素材に押し当てて、何回か擦りつけると、まばゆい輝きを放ち始めた。目の前が青白い光に包まれる。力の入れ方を間違えると溶接棒が金属素材にくっついてしまい、赤熱した素材自体がバチバチと放電を始める。これにはかなりビビった。どうにか一通り終えた後、出来具合を確認すると、曲がったり途切れたりダメになったりとなかなか前衛芸術的な仕上がりだった。初めてだから仕方ないのだが、溶接職人の方々はずごいのだと感じずにはいられなかった。




旋盤


旋盤とは、材料自体を回転させ、それに刃を当てることで切削加工を行う工作機械である。現代では数値制御方式が主流だが、実習では昔ながらの手動で加工を体験した。実習では、2本の金属棒からホイッスルを製作した。ネジや接着剤は一切使っていないのだが、しっかり音階の調整もできるという優れものである。指導スタッフの方から説明を聞いてから、実際の加工に臨む。グルグルと高速で回転する材料に、慎重に刃(バイト)を近づけてゆく。刃が材料表面に触れたと思った刹那、手に感じる抵抗が大きくなり、僅かな火花と共に金属が削られ始めた。その様は野菜の皮をスルスルと剥くようで、見ていて実に小気味が良い。そこからは切削と寸法測定をひたすら繰り返す。外形を削り出し、ドリルで空洞を穿ち、余分な部材を切り落とす。機械で撃力を加えて、シリンダー状部品にピストンを打ち込めば、晴れてホイッスルの完成だ。初めて自分で金属を削り出して作った製品。『夢十夜』の表現を借りるならば、金属棒に埋まっているホイッスルを掘り出したのだとでも形容しようか。とにかく、そんな達成感をひしひしと感ずることが出来た。

この2つ以外にも様々なことを体験できるのだが、ここでは割愛する。さて、そろそろ本記事のタイトルを回収しよう。あなたはネジの作り方をご存じだろうか？ちなみに、私は実習で扱うまで知らなかった。現代では自動化された機械で生産するのが一般的だが、金属棒に専用の工具を押し当てて溝を掘ることもできる。ネジ—意識こそしていないが、この現代において全くネジの世話にならない一日などあろうか。家電、自動車、建物—ネジはあらゆる構造物に使われている。そんな身近な部品の作りさえ私は知らなかったのだ。これは恐ろしいことである。どうやって作られたのか知りもしない技術で構成された社会を日々生きている、いや生かされている。身の回りの道具をほとんど自給していた先史時代の人々はどれだけ幸せであったことだろうか。しかし、ソクラテスによれば、知らないということを知覚するという事で、そこに探究が生まれるのだという。いま、私は「無知の知」によって、今までより数センチ高い視点を手に入れた。機械工学の海への本格的な船出を前にして、私はときめきを覚えずにはいられない。


※ 以前は“Okubo Institute of Technology, OIT “(大久保工科大学)という記事がWikipedia英語版に存在しており、その内容も早稲田大学理工学部についてだった。誇らしい限りである。現在は削除されているが、Wikipedia英語版で“Okubo Institute of Technology “と検索すると、” Waseda University “にリダイレクトされる。




Reborn: フェニックスのように



Writer: Takato
Translator: Moeka
Designer: Asami



重たいウェイトバーをゆっくりと胸の方に下げると、上半身がきつく引き締まるのを感じた。バーを下げきったとき、僕の全身は燃え上がるようだった。聴いていた音楽のサビを待つ間、ウェイトを静かに体に乗せた。音楽が私の耳に響き始めたとき、私は全力でバーを空中に突き上げた。僕は目標を達成するため、日々この重力に挑み続けた。そして自信を持って言えるのは、この戦いが僕の人生を前向きにさせてくれたことだ。ただ、今の自分があるのは過去があるからであって、今日はその話をしようと思う。



当時17歳の僕は内向的で、体も虚弱な体質だった。当然のことながら、僕は自己肯定感が低く、スポーツに関してもあまり得意な方ではなかった。僕はどんなスポーツでも、なかなか上達することはできなかった。あまりの自信のなさに、友達を作ることにも苦労した。僕は仲間にからかわれたり、馬鹿にされたりすることがよくあった。それらをプレッシャーに感じながらも、どこに逃げればいいのかさえ分からなかった。そして僕が高校3年生の頃、父が家の近所にあるジムに入会した。父は僕にも利用するよう勧めてきたが、僕は躊躇していた。だけど結局父の意志の強さに押され、仕方なく従うことにした。



初めてジムに足を踏み入れた日どれほど緊張していて、場違いだと感じたかをはっきりと覚えている。僕はジムの匂いが気になって、その日はトレッドミルで走るだけにした。そして一週間後によく勇気を出してダンベルを持ち上げてみた。僕は汗水たらしてトレッドミルで走り、震える腕でダンベルを持ち上げた。ジムに通うことは、少しずつ僕の人生でかけがえのないものへと変化した。それから僕はより良い睡眠を心がけたり、健康的な食事にも意識して、嫌いだった野菜も日に日に食べる量が増えていった。体にも小さな変化が現れてきて、筋肉の成長や体が力強くなっているのを感じ取ることができた。姿勢を直したせいか、徐々に自信もついてきた。僕はもっと人と交流を深めようと、新しいスポーツに挑戦することにした。サッカー、卓球、水泳、バドミントン、バレーボールを始めてみた。気づけば自ら友達にスポーツをしようと誘えるようになっていた。



まるでフェニックスのように、僕は生まれ変わった。筋トレで増量することに成功し、ライフスタイルを見直したことで、自分の内なる可能性を引き出した。最初は恐ろしいくらい辛かった。早朝の腕立て100回と腹筋150回から1日が始まり、放課後はトレッドミルで走り、段々とウェイトの重量も上げていった。これほど努力してきた僕の最大の教訓は、成功への道は自制心を鍛えること。日々のプロセスを信じることだと周りからアドバイスをもらった。それは時に耐え難く、退屈かもしれないけれど、努力は必ず報われるだろう。



愛

MY LOVE FOR

Writer: Satoshi

Translator: Renuka & Satoshi

Designer: Satoshi

○ はじめに①

6月10日。この日付が意味するものといえば、誰かの誕生日だとか、何かの記念日だとか、そういったおめでたい類のものでは決してない。6月10日、その1日の終点、23時59分。この記事の締切期日である。そして現在の日付は6月11日、時刻は0時5分。すでに締切をオーバーしている。夏、炎天からの熱射、デッドラインを過ぎてなお走り続ける私の後方、編集部RAたちからの視線が痛い。私の背中には鋭い視線のレーザーポインターの赤い点が7人分合わせて14個ついているであろう事を容易に想像でカウントすることができる。その赤い光のシミは私の背中にこびりついて、そこにいくらか含まれている罵倒や軽蔑の念が、私の皮膚をじりじりと焦がす。もういっそ、その場で振り返って、私の怠惰な性根ごと撃ち抜いてもらおうかとも思うが、だからと言って振り返る勇気はないし、ましてや顔を覗いて表情を伺うことは恐ろしくてできない。野生動物の世界において、背中を見せることとは、相手に負けを認めることと同義であるが、この場合、背中を見せてでも走り続けることが私が取れる唯一の行動である。

○ はじめに②

私にとってこれが最後の記事になる。こんな感じで感傷的な文章が始まりそうな宣誓を枕詞的に置いてしまえば、私のスンドゥブメンタル（チゲとよく合う）はたちまちほろほろに崩れ落ちて、また締切から遠のいてしまうのだが、とにかく、これが最後の記事である。思えば、WISH Timesには寮生時代を含めて、1年半以上関わってきた。

きっかけは、WISHのハロウィンイベント後、たまたまWISH Timesを担当している先輩RAに誘われたことから始まる。その時も記事の締切日を過ぎてしまったことで、先輩RAからお咎めをもらい、1年間記事を書き続けるようにと呪いをかけられてしまった。そして、1年半以上、ヒッチハイクと高円寺に関する記事を書き続けて、今に至るわけだが、さらに大学を卒業してからも文章書くお仕事に関わっていくことになったので、これは本当に呪いだと思う。この呪いの解き方を私は知らないの、とりあえず唇を尖らせて、王子様のキスを拝受できる順番を、整理券を握りしめて待っている状態だ。

相変わらず読者がいるのか、いないのか定かではないWISH Timesであるが、ここに一人確実にヘビーな読者がいる。それは、他ならぬ私であり、1年半以上編集兼ライターとして関わり続けてきた私のWISH Timesへの愛はかなり重い。雑誌自体へはもちろん、編集、ライター、トランスライター、デザイナーも全員まとめて愛である。創刊から5年経つWISH Timesの記事の中には実にたくさん名文が転がっており、紹介したい大好きな記事がいくつもある。ということで、最後である今回は私が愛するWISH Timesの記事について、記事にする。

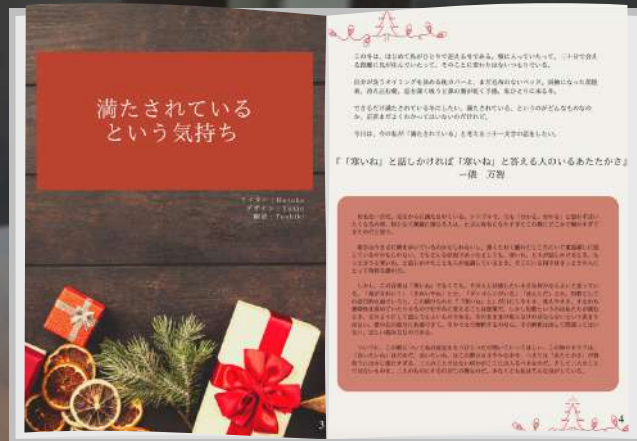


○ 2020年3月号 vol.35 「WISHでパンライフ」 (ライター: Moeka)

本号は当時寮生だった私が初めて記事を寄せた思い出深い号である。中でも「WISHでパンライフ」という記事は、WISH周辺にある筆者おすすめのパン屋さんについて、場所、味、店の雰囲気などの情報が、五感をフルに使った文章表現で書かれており、焼きたてのパンの香り、味、食感が今にも紙面から伝わって来そうである。また、最近ブームが到来している朝活をする上でも有益な記事なので、ぜひご一読の上、セントラルパークでパンを食べながら有意義な朝を過ごしてみたいかがだろうか。それと、実はこの記事を書いていたのは、現在RA・WISHTimes編集長であるMoekaであった。私が編集長の座を引き継いだけあって、寮生時代から逸材であったことがこの記事からも窺い知ることができる。最後にもう一つ、個人的にこの記事の好きなポイントは、紹介文ではそれぞれの店の良いところを押さえているものの、星ではしっかりと辛口な評価がなされているところである。このあたり超感覚派で自分の好き嫌いを大切にしているMoekaらしいと思った。

○ 2020年10月号 vol.38 「深淵（なかの）を覗くとき、深淵（なかの）もまたあなたを覗いている～北口5分のラビリス～」 (ライター: Daichi)

初めて編集長として関わったこれまた思い出深い号である。その中で一際、異彩・異香を放っているのがこのクセの強いタイトルの記事だ。この記事では、中野で生まれ育ち、実家がWISHから徒歩5分の場所にある筆者Daichiが中野や中野ブロードウェイについて、歴史的な背景や中野ブロードウェイ振興協会理事長のインタビューなどを交えて紹介している。内容が素晴らしいことはもちろんなのだが、このDaichiという男の文章は、珍味のようにとても癖になる。巧みな文章の中には、皮肉的で自虐的なユーモアが随所に散りばめられており、常に斜めから核心をついてくる。現在では、2年生ライターとして、WISH Timesの日本語記事を引っ張ってくれているDaichiだが、彼が初めてライターを務めた本記事でも、初々しさを全く感じさせないところがさすがである。居室でラップトップを開き、キーボードを実直に打鍵している、少し猫背気味な背中が思い浮かんで来る。



○ 2020年12月号 vol.40 「満たされているという気持ち」 (ライター: Haruka)

12月号「暮らしに冬の彩りを」は記事、翻訳、デザインの完成度が高く、個人的に最も好きな号である。その質を一気に引き上げてくれているのが、Harukaの「満たされているという気持ち」という記事である。自身でも短歌を詠む彼女が、冬の暮らしがより豊かになるような短歌を紹介し、評をしてくれている。

「鎌倉で猫と誰かと暮らしたい 誰かでいいしあなたでもいい」

この「誰かでいいしあなたでもいい」という部分は一見すると、筆者が抱えている寂しさを誰でも良いから埋めてほしいという仄暗い短歌のように思える。しかし、Harukaは、作者と一緒に住みたいのは「あなた」でしかなく、これは逃げ道を与えた緩やかな愛の告白なのではないか、と評をしている。この酸いも甘いも噛み分けたような考察には、実年齢を偽っているのではないかという疑いを抱かざるを得ない。彼女の文章は、日常で手の届く範囲の語彙を丁寧に拾い集めて文章にしているようで、読んでいて優しい気持ちになる。この感受性はどう頑張っても真似できないので諦めているが、こんな感性で日常を眺めてみたら、どんな世界が見えるのかなど、たまに空想したりもする。



ここで編集という業務について話したい。私はこの編集をしている時間が、とても好きだ。WISH Times は寮生たちにある程度長い文章を書いてもらうことになるので、ライター一人一人の文章の中から、性格だったり、人間味だったり、癖だったり、がどうしても滲み出てくる。しかも、それは本人の自覚から離れた部分だったりもするので、私はそういうその人特有の何かを見つけた時、かわいい尻尾見えてますやん、という感じにニヤリとする。このように私レベルのヘビーな読者になれば、行間を読むどころか、インクの上澄みを舐め取るような変態的な読み方をする。とはいえ、私もこれまで散々記事を書き続けてきたので、私の性格や癖は、読者の方たちに垂れ流しなわけなのだが、それを読んで私の人物像をどう描くのかは、みなさんにお任せする。



○ 2020年2月号 vol.41 「東京は森の中」 (ライター: Miyumi)

2月号のテーマは「さよなら。」だった。WISH Timesをずっと一緒に作ってきた先輩RAのMiyumiさんが最後に記事を書いてみたいと言ったので、急遽制作が決まった本号。発行までの期間がかなり短く、また期末テストの時期とも重なっていたが、長年WISH Timesを支え続けてきた彼女のために、すぐに多くのメンバーが集まってくれた。Miyumiさんは誕生日とか、見送りとかそういう形式めいたなものを嫌っていたのだが、そんな彼女が「さよなら。」というテーマを前に、最後に別れを告げたのは東京の美しい木々たちだった。

季節の移り変わりとか、それに応じて変化する動植物の機微とか、そういう小さな気づきを大切にしている彼女だからこそ書ける文章で、いつも感受性豊かで、徒然で、ふんわりと芯を捉えてくる彼女自身が語りかけてくるようだった。「森」とか「木々」が具体的に何を、もしくは誰をメタファーしているのか、正確なところは本人に聞いてみないとわからないが、その木々の中の本に私自身も入っていたらいいと思う。たくさんのご迷惑をかけてきたが、WISH Timesを作ってきた大切な仲間の編集に最後に携わることができて幸せだった。

○ 終わりに

季節は夏。春に生まれたいくつもの何かが、次々に膨らみだして、たくさんの思い出に変わる季節。お別れのシーズンといえば、おおよそ冬の終わりど相場が決まっていますが、こんなにも、さよならを言うのが似合わない季節にWISHという寮へ、そして寮生時代から関わってきたWISH Timesへ別れを告げなくてはならないのは本当に寂しく、みんなの文章を、英訳を、デザインを一番乗りで見られる特等席にもう少しだけ座っていたかったです。

少々文章が内輪へ向けたものになってしまいましたが、しかしこの文章を読んでいただいた読者のみなさんは、すでに内輪の中です。読者の皆さんの存在は、私たちがこの雑誌を作り続ける上で励みになります。どうか今後ともWISH Timesをよろしくお願いします。そして、もしテンションが良ければ、読んだことや感想をWISH Timesメンバーたちに伝えてあげてください。自分たちが一生懸命作ったものを、誰かに読んで、見てもらえて、それから感想を言ってもらえるというのは、やっぱり嬉しいものなんです。今回の7月号も素敵な記事ばかりです。何卒。

記事も終わりに近づいてきましたが、やはり編集メンバーがいる後方を振り返ることは恐ろしくてできないので、このままWISHを背に逃げ切りを凶ろうと思います。グッバイ。自分の背中を覗き込むことは体の構造上できませんが、私の背中に感じられる熱から、軽蔑の念とか夏の暑さとかを引いて残った温度が、温かい眼差しの分であることを願います。

とか言いつつ、なんだかんだ私を甘やかしてくれた編集部RAのみなさん、素晴らしい記事を書いてくれたライターのみなさん、記事を素敵に彩ってくれたデザイナーのみなさん、より多くの読者に届けるために翻訳をしてくれたトランスレーターのみなさん、WISHTimesに関わるきっかけをくれた先輩RA、毎回丁寧にご校閲いただいたレジデンスセンターのみなさん、本当にありがとうございました。皆さんと一緒にWISH Timesを作ることができて、WISHTimesという雑誌に関わることができて本当に幸せでした。また、存在していると信じたい読者のみなさん、今まで私のレポート並に長い駄文を読んでもくださりありがとうございました。

WISHを離れても、WISHTimesの1番の読者でい続けます。

それでは、さよなら。



Satoshi

Contributions

Writers



Daichi



Takato



Chrisanne



Sarah



Haruka

Translators



Naomichi

Designers



Ainun

RA Supporters



Moeka



Asami



Satoshi



Renuka



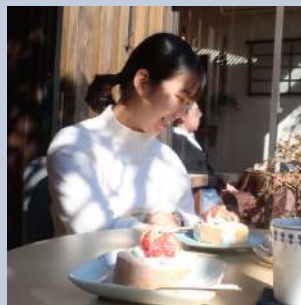
Yukie



Miho



Rio



Ren



Non